

## シップ・オブ・ザ・イヤー2022 選考経緯

選考委員会には、川崎委員が欠席して 11 名の委員が出席した。

まず、各委員がシップオブザイヤーに相応しいと思う船を 1～2 隻程度、その推薦理由も説明しながら挙げることから始めた。その結果「松風丸」が 8 票、「さんふらわあ くれなゐ」が 3 票、大河が 2 票、あさひ、のがみ、第五十八金栄丸は各 1 票を獲得した。

その後、各船の評価についての議論が行われ、さらに臨席していた予備審査委員会の委員の意見も聞きながら「松風丸」と「さんふらわあ くれなゐ」についての議論をさらに進め、最終的には「松風丸」を全会一致でシップ・オブ・ザ・イヤー2022 に選出した。風を利用した貨物船は、オイルショック後にも登場しているが、地球環境保全の流れの中で、再び、開発が行われて、実用化までされたことが高く評価され、かつ外観が目立っていてよいとされた。

次に各部門賞の選考に移った。

まず大型客船の部の「さんふらわあ くれなゐ」については、環境負荷の小さい LNG 燃料のカーフェリーの本邦第 1 船であることが高く評価され、全員が部門賞に相応しいという結論に至った。

次に小型貨物船部門では「あさひ」と「のがみ」について選考が行われた。「あさひ」についてはバッテリー駆動の電気船であるが、バッテリー電気船の受賞が過去に 2 回あることから、その新規性をどう評価するかで意見が割れた。一方、「のがみ」については、球形船首ブリッジによる風抵抗を低減については類似船があるものの、さらに波による抵抗の削減を試みたことと、内航船員のための教育機能をもたせたこと、また日本のコンテナハブ港復活のキーとなる大型の内航フィーダー船としての実績を高く評価する意見があった。投票の結果、「のがみ」が 6 票、「あさひ」が 5 票となり、僅差であるが「のがみ」に軍配が挙げられた。

漁船・調査船部門では「海神丸」は、大学の研究・教育に携わる船としてのすぐれた機能を有すると共に、災害時の支援にも活用できるように考慮されていることが評価され、全会一致で部門賞を授与することが決定された。

作業船・特殊船の部門では、「第五十八金栄丸」と「大河」の 2 隻について、活発な議論が行われた。「第五十八金栄丸」については地味な船ではあるが、社会インフラを整備する上で重要な役割を果たす海砂の採取、船上洗浄を効率的に行うこと、陸上からの監視システムなどが搭載され、作業船にしてよく考えられて開発されている点を評価する意見が多く、一方「大河」についてはハイブリット電気推進のタグボートとして今後のプロトタイプにもなると高く評価する意見もあった。議論の後、投票で決定することとなり、「第五十八金栄丸」が 6 票、「大河」が 5 票の僅差で「第五十八金栄丸」が部門賞を獲得した。

海洋構造物・海洋機器部門では、防衛装備庁の水中無人機 UUV について議論が行われた。モジュール化された船体、構成機器、そして AI を使った自律機能の開発が評価され、かつ、発表の中で民生品への開放も視野に入れていること表明したことを評価する声があった。議論の後、全会一致で部門賞を授与することが決定された。

選考委員長 池田 良穂